

論文の内容の要旨

論文題目 「ダバオ市におけるバジャウの都市経済適応過程
——経済的生活水準とエスニック・アイデンティティの観点から——」

氏名 青山 和佳

本研究の課題は、フィリピンのダバオ市におけるバジャウ (Badjao) を事例として、彼らの経済的な生活水準 (standard of living) が向上(低下)するときに、先住民/少数民族がもつ選択の自由・権利という観点から重要な福祉 (well-being) であるエスニック・アイデンティティにどのような変容が生じうるのか検討することである。この課題を追求することで、開発経済学が中心的課題としてきた「国民」 (nation) の経済成長の達成という考え方に対して、その意義を認めつつ、それでは見落とされてしまう、ひとびとの暮らしぶりとその向上 (低下) を分析、理解する上で重要な視角を提起したい。本稿の主要部分では一次資料を中心に議論を進める。実態調査は、1997年8月から1999年12月まで継続的に行われた。本論文は2部8章から構成され、各章の要約はつぎの通りである。

第1章では、本研究の基本的性格と分析の枠組みを提示した。はじめに、先住民の市場参加過程に関する先行研究の批判的検討を通じて、生活水準/福祉を考える上でなぜエスニック・アイデンティティが重要であるか明らかにした。開発経済学においては、選択の自由・権利という観点から生活水準/福祉の重要な要素でありながら、エスニシティ/民族変数は分析の対象として明示的に論じられてこなかった。一方、先住民を個別社会の文化や価値観をになった主体としてとらえようとする人類学的研究では、エスニック・アイデンティティはその集団の文化特性であるだけでなく、適応の過程で生じるさまざまな困難に対処するための能力の源泉たる資源でもあると捉えられており、本研究は基本的にこのアプローチを応用するものである。これらをふまえて、本稿全体における分析の視点と方法を設定し、エスニック・アイデンティティの概念規定について述べる。章末に本稿の構成を示した。

第1部は第2章から第5章までの4章からなり、ダバオ市における社会、文化、政治的環境を概観しながら、そこに暮らすバジャウ (サマ) について社会経済的状況を明らかに

するよう努めた。

第2章では、ダバオ市のバジャウが連なるサマ語集団に関する先行研究のサーベイを行い、さらに現在のフィリピンにおけるナショナル・レベルの先住民政策の概観することを通じて、彼らを取り囲むマクロ的な状況について整理した。歴史的にバジャウとは、サマ語集団のうち家船生活者を指す。それはタウスグなど他の有力エスニック集団からの他称かつ蔑称であった。1960年代以降の研究によれば、海サマにみられた家船を居住場所とする生活様式は、第二次世界大戦後、島嶼東南アジアが新生国民国家となってからは近代化の波を受けて大きく変容した。近年のバジャウ（サマ）研究に照らすならば、「貧しい先住民／少数民族」という焦点のあて方はまれであり、むしろ地域における商業資本主義の浸透や国境の登場に柔軟に対応してきたとする事例が報告されてきたが、本研究が扱うフィリピンにおけるバジャウは、街角で物乞いするイメージから都市の最貧困層とみなされている事例という点で新しい。さらに、本章では、現在のフィリピンにおける先住民政策の枠組みでは先住地保障が中心であり、先住民の組織だったイニシアティヴが重視されていることから、恒常的な政治的統合をもたない漂泊性海洋民で、先住地を離れて都市に移住したダバオ市のバジャウのようなグループは保護の対象となりにくいことも確認した。

第3章では、ダバオ市のバジャウを取り上げ、質問紙調査で収集した客観的指標によって経済的な生活水準を把握するとともに、非サマとの相対的位置づけにおいても彼らが都市貧困層であることを明らかにした。スルー・サンボアング地域の内戦・治安悪化を背景に難民的性格をもってダバオ市に流入してきたバジャウは、セブアノ、タウスグ、マラナオ、ラミヌサなどの非バジャウ・グループと比べて、学歴が極端に低い。労働市場参入に必要なスキルが低く、かつバジャウに特殊的な限られた生業——漁業、貝殻・真珠販売業、古着販売業（行商）、物乞い——に就いていた。生活水準を示す諸指標——所得・支出・負債、住居・耐久消費財など——は、軒並み非バジャウを下回り、物質的な貧困は否定しがたい。また、主観的調査による民族間イメージの把握によれば、非バジャウはクリスチャン、ムスリムの別なく、バジャウに対してネガティブで蔑視的なイメージを抱いていた。

第4章では、視座を移してバジャウ内部の社会的不平等を探究するため、社会的地位に関するバジャウ住民の主観的な意識調査の結果を用いた分析を行った。各世帯の社会的地位は、個別に評価されるよりも、まずはそれが属するところのグループ単位で評価されるという2段階の認識を経る傾向が強い。そうしたグループは5つあり、それぞれちがった特定の生業に対応している。すなわち、社会的地位の高い順に、1)男子：貝殻・真珠販売

業（ホテル）、女子：主婦か非漁業、2)男子：貝殻・真珠販売業（ホテル・行商）、女子：古着行商業、3)男子：貝殻・真珠販売業（対貨物船・行商）、女子：主婦か古着行商業、4)男子：漁業（ボボ[魚伏籠]）・パラングレ[延縄]）、女子：古着行商業・物乞い、5)男子：漁業（パナ[突き漁]）、女子：物乞い、という構成が典型であった。これらの生業グループは親族・地縁集団とも対応しており、彼らがダバオ市の都市経済に適応していく上でのひとつの単位と考えられるから、第2部における観察・分析単位として有効である。また、社会的地位に関する評価基準の分析から、バジャウ自身が考える生活水準の向上とはどういふものか検討し、基本的に経済的な基準が重要であるという結果を得た。

第5章では、生業グループ別に事例分析を行う第2部の準備として、彼らが就いている生業の特徴を明らかにした。具体的には、生業面における世帯内分業の存在を前提としながら、彼らが就いている生業を男子型生業（漁業、貝殻・真珠販売業）、女子型生業（古着行商業、マット織り）、および女子・子ども・高齢者型生業（物乞い）の3つに仮設的に分類した上で、生業の概要（商品の概要、営業の様相、所得など）、参入障壁と他のエスニック・グループとの関係という観点から分析した。この作業を通じて、バジャウが就いている生業がダバオ市地域経済で占める位置が、少なくとも交渉面においてマージナルであることも明らかにした。

第2部は、第6章から第8章までの3章から構成される。第1部における分析をふまえて抽出された、経済的な生活水準が異なる5つの生業グループについて代表的世帯をとりあげ、ダバオ市における都市経済への適応過程とエスニック・アイデンティティの現れ方について比較分析する。

第6章では、まず5つの生業グループについて経済的行動の違いやその要因について比較分析した。分析の枠組みとして援用したのは「家計戦略」である。つぎに経済学的なアプローチとしての家計戦略の概念枠組みには明示的に組み込まれていないものの、人類学的なアプローチでは環境への適応するための重要な資源であり、同時に自己の在り方・生き方の根源に関わってくるエスニック・アイデンティティの現れ方——サマとして自分自身や内部者に対する自己表現、バジャウとしての他人に対する自己表現——について、グループ間の比較をした。その結果に基づき、経済的な生活水準の異なる生業グループ別に、1)エスニック・アイデンティティの現れ方と使い方、2)変化をもたらした主体についての類型を仮設し、つぎのような結論を得た。ダバオ市におけるバジャウの場合には、事例分析の結果が示すように、経済的な生活水準の向上は必ず文化変容をとらなければならないが、それは直

ちにサマとしてのアイデンティティの喪失にはつながらない。むしろ経済力をつけることで自分たちらしさをどこに残すか自己選択できる余地が生まれる。他方、経済的な生活水準の向上がみられない、あるいは低下している場合の文化変容は、半ば強制的な同化、文化剥奪やアイデンティティの自虐的表現につながりやすい。

第7章では、生業グループ別に、属性、一般的な生活水準、社会関係などについて記述分析を行い、1)経済的な生活水準——所得や消費など——の量的・質的把握と、2)その水準を満たすために実際にどのような行動がとられるのか、という過程の把握、および、3)家計の経済的実態が非経済的要素——宗教・社会儀礼など——を含む暮らし全体にどのような可能性、あるいは制約を与えているのか把握しようとした。この作業を通じて、5つのグループは析出地のちがいにかかわらず以前は漁業を生業としていたが、ダバオ市に転入してからはそれぞれに異なる生業転換を経験し、経済生活ばかりでなく暮らし全般に多様な適応状態を経験している様相を具体的に描いた。

第8章は各章の要約と結論を述べたうえで、分析結果の含意としてつぎのような諸点を掲げた。ダバオ市のバジャウという事例に関する政策的含意としては、1)エスニック環境に配慮した介入の必要性、2)エスニック・グループ内部における不平等に配慮した介入の必要性、3)最低生活を維持するための所得獲得の必要性、4)政策介入においてサマの文化要素を配慮する必要性、5)政策介入における「文化の仲介者」の必要性、などである。また、フィリピンにおける先住民政策／研究に関する一般的含意としては、1)適応のヴァリエーションを生むひとつの要因として「介入」を考慮した研究の必要性、2)マイノリティの多様性と自治権付与では解決しないもうひとつのミンダナオ問題、3)多文化主義政策への適応にみる注意点、などである。さいごに今後の課題を述べた。